家族はプリキュア

嶋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家族はプリキュア

【Ｎコード】
Ｎ３４１０Ｚ

【作者名】
嶋

【あらすじ】
ピクシブで連載されている小説を移す事にしました。物語はラブとせつなの娘が主役で、ラブとせつなは母親と言う立場で家族を中心に描いた物語です。歴代主役プリキュアはゲストとして出していきます。

登場人物１

登場人物１

桃園ラブ／キュアピーチ（３６）

かつてはキュアピーチに変身して戦っていた。せつなと一緒に結婚してせつなとの間に同性出産で自分そっくり子供を産んだ。現在は四ツ葉町を離れてせつなと子供と一緒にミッドスターという世界で心星町へ暮らしており、仕事はほぼ彼女が勤めている。プリキュアの力は今でも維持している。

桃園せつな／キュアパッション（３６）

元ラビリンス幹部。かつてはキュアパッションとして戦っていた。ラブと一緒に結婚してラブとの間に同性出産でラブと同じく自分そっくり子供を産んだ。現在はラビリンスを離れてラブと子供と一緒にミッドスターという世界で心星町へ暮らしている。プリキュアの力は今でも維持しており、家事は全部彼女が任せている。名字は桃園と名乗っている。

桃園アイ／キュアアップル（１４）

イメージＣＶ：戸松遥

ラブとせつなの間で生まれた子供。ラブのお腹から出産した女の子で、元気よく明るい性格で運動、家事の２つを得意としている。勉強が少し苦手な面がある。彼女は運動が抜群で、学校のクラスにおいて１番である。学校ではいつもマコトと一緒に過ごしたりする事が多く、休日は家族と過ごす事が一番多い。

ラブとせつなの二人の母親思いは一番で二人の母親になつく事がある。嫌いな物はにんじん、爬虫類の２つである。プリキュアとしてはキュアアップルに変身する。

掛け声「幸せ掴むんだから！」

桃園マコト／キュアチェリー（１４）
イメージＣＶ：豊崎愛生
ラブとせつなの間で生まれた子供。せつなのお腹から出産した女の子で、大人しくてて優しい性格でアイと同じように勉強、運動、家事の３つとも得意である。彼女は学校のクラスにおいて運動はアイに次ぐ２番目で、成績はクラスにおいてトップである。学校ではいつもアイと一緒に過ごしたりする事が多く、学校ではいつもマコトと一緒に過ごしたりする事が多く、休日は家族と過ごす事が一番多い。
ラブとせつなの二人の母親思いは一番で二人の母親になつく事がある。嫌いな物はピーマン、オバケの２つである。プリキュアとしてはキュアチェリー変身する。
掛け声「一生懸命負けないくらいやるわ。」

プリキュア１
キュアアップル
アイが二人の母からリンクルンと専用ピックルンのリルンを渡されて、プリキュアに変身した姿。ピーチと同じ色と髪をしたレモンイエローのツインテールが特徴。イメージカラーは桃色と赤で、服装の色全体が桃色で、細かい部分は赤。少しキュアピーチと似ているところが多い。

必殺技
プリキュア・ラブハート
手をハートの形にして放つ桃色の光線技。キュアピーチの放つプリキュア・ラブサンシャインに似ている。

キュアチェリー
マコトが二人の母からリンクルンと専用ピックルンのミルンを渡さ

れて、プリキュアに変身した姿。パッションと同じ色と髪をした淡いピンク色となり、腰まで伸びるような長髪が特徴。イメージカラーは桃色と赤で、、服装の色全体が赤で、細かい部分は桃色。少しキュアパッションと似ているところが多い。

必殺技
プリキュア・ハピネスハート
手をハートの形にして放つ赤色の光線技。キュアピーチやキュアアップルと同じ放つ光線技である。またキュアパッションもこの３人と同じ光線技を放つ事が出来る。

キュアピーチ
ラブがピルンの力によって変身するプリキュア。姿はかなり１４歳の時と異なっている事で、大人としての姿は髪型やコスチュームが変わっていて、スカートがムーンライトと同じロングスカートを着用してて、足にパッションと同じタイツを着用している。服の色が全体が桃色、細かい部分は赤、白。髪型がツインテールからロングヘアとなっている。これらのコスチュームの変更は大人としてのキュアピーチの姿を表している意味でもある。またパッションと結婚した事によってお互いのピックルンの力を共有して使う事が可能になった。

必殺技
プリキュア・ラブサンシャイン
手をハートの形にして桃色の光線技を放つ。

キュアパッション
せつながアカルンの力によって変身するプリキュア。姿はピーチと同様に１４歳の時と異なっており、大人としての姿は髪型は１４歳のままとは変わらず、コスチュームの方は黒の部分が白、ピンクに

変更されており、アームバンドはピーチと同様短いのに変更されており、スカートはピーチと同じロングスカートを着用している。服の色が全体が赤、細かい部分などは桃色、白。これらのコスチュームの変更は大人としてのキュアパッションの姿を表している意味でもある。またピーチと結婚した事によってお互いのピックルンの力を共有して使う事が可能になった。

必殺技
プリキュア・ハピネスウェーブ
キュアパッションの唯一の光線技。手をハートの形にして赤の光線技を放つ。

合体必殺技
プリキュアファミリーハート
アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアのそれぞれの合体技を同時に繰り出す合体技。

プリキュアクアドラプルパンチ
アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが４人同時に繰り出すパンチ攻撃。威力は巨大な敵を吹き飛ばすほどの威力を持つ。本来ならベリーとパインと一緒に組んでやる技だが、ピーチとパッションの双子の娘のアップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。

プリキュアクアドラプルキック
アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが４人同時に繰り出すとび蹴りを放つ技。こちらもプリキュアクアドラプルパンチと同様アップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。

プリキュアコンビネーションキック

アップル、チェリー、ピーチ、パッションの母子プリキュアが４人が同時に空中から降下しながら　飛び蹴りを繰り出す合体技。こちらもプリキュアクアドラプルパンチやプリキュアクアドラプルキックと同様アップルとチェリーでも一緒に使用する事が可能。母子でも一緒に合体技を使う事が可能。

第1話　私たちプリキュアをはじめます（前書き）

第一話はアイとマコトがプリキュアに変身するお話です。戦闘や敵はまだ次回から出てくるので、1話は日常もので家族との生活や少しだけ学校生活で。

第1話　私たちプリキュアをはじめます

かつて世界を救った二人のプリキュアはお互いに思いやり、愛し合いながらその二人のプリキュアはやがてお互いに結ばれる事になった。

それから結ばれた二人のプリキュアは、女性同士でありながらそれぞれ母体から命が宿り、そして子が生まれた。生まれてから１４年の歳月が経った。

「ラブ、アイ、マコト、３人とも起きて？。」ラブとその二人に声をかけるせつな。

「今起きるからまってて！」

「せつなママ、今起きるから～。」

「私もアイもラブママも今そっちへ行くから～．」その二人からママって呼ばれているのはラブとせつな。ラブとせつなのの二人はかつて伝説の戦士プリキュアとして活躍して世界を救い、今は二人は結婚して女性同士による同性間出産でそれぞれ子供を出産した。

アイはラブが生んだ子で、元気で明るい１４歳の少女。彼女は勉強はいまいちだが運動や家事などは得意。かつて母ラブと同じプリキュアだったなぎさ（キュアブラック）と咲（キュアブルーム）に似ているところが少しある。目の瞳や髪の色や性格も１４歳の頃のラブにそっくりなところがある。

マコトはせつなが生んだ子で、大人しくてて優しい１４歳の少女。

彼女は勉強や運動や家事が全部得意。かつて母せつなと同じプリキュアだったほのか（キュアホワイト）と舞に似ているところが少しある。目の瞳や髪の色も性格も１４歳だった頃のせつなにそっくりなところがある。

それから朝を起きて３人はせつなの作った朝食を食べる事になった。

「いただきます！」二人の母親と二人の子供と４人一緒に朝食を食べながら楽しそうに送っていた。

「せつなのがいつも作っている朝食はおいしいわ。」

「あらラブ、ありがとう。」せつなはラブの頬に唇を優しく近づけた。

「ラブの事をいつでも愛しているわ？」唇を近づけた後、ラブにそう告げた。

「わあ？、せつなママ、ラブママだけにチュウするなんてずるい？。」

「ねぇせつなママ、私やアイにもほっぺにチュウして。」二人の娘も母せつなにもう一人の母ラブみたいにチュウして欲しいと求めてきた。

「アイやマコトにも今からせつなママのチュウしてあげるわ？」アイやマコトの二人の娘にもそれぞれの頬に唇に近づけた。

「せつなママはラブママもアイもマコトの事を愛しているわ。」

「あたしも二人のママの事大好きよ。」

「　私は二人のママが大好き。」

「アイもマコトも大好きって言っちゃって、もう?」アイやマコトに抱きついついて二人の顔に近づけてすり寄るラブ。朝食が終わって、家を出てラブは仕事に、アイとマコトは学校へ行った。学校で二人は同じくクラスでありながら、学校での生活を送っていた。

「アイ、マコト、おはよう。」

「由樹もおはよう。」由樹は二人の同じクラスの同級生。

「二人ともいつも一緒に学校に通っているわね。」

「うん、あたし達双子だからいつも一緒よ。」

「双子わりにはアイは運動が得意でも勉強とかいまいちでしょ。」

「それ言わないで?。」

「アイったら少しなぎささんに似ているところがあるわね。」明るい学校生活をいつもながら不公平な事なく送る二人。時間が経ち、ようやく放課後に学校から下校して自宅へ帰宅した二人。

「ただいまー。」

「二人ともおかえり。」家から帰ってきた二人の娘を笑顔で出迎えた。夕食はいつもせつなが作っているんだが、今日はラブが仕事が早く終えたから今日の夕食はラブと一緒に作る事になった。

「今日の夕食はダブルママの特製ハンバーグと野菜炒めとカボチャのスープよ。」今夜の夕食は二人が作ったハンバーグと野菜炒めとカボチャのスープであった。特にハンバーグはラブが１４歳の時によく作った事があり、せつなも桃園家にいた頃はラブの母あゆみからいろいろと料理を教わったり、学んだりして、彼女も今は母親として大事な我が子達に食べさせる料理など作れるようになっていた。

「ええー、あたしの嫌いなにんじんがある！」

「私、ピーマンは無理・・・・。」

「二人とも好き嫌い言わないで食べなさい。」

「はーい。」夕食を食べ始める４人。野菜炒めを口に加えようとしている二人の娘の姿を見る二人の母親。

「何か、昔の事を思い出しちゃうわ～。」

「私やラブも１４歳の頃は好き嫌いがあったから。」

「にんじん食べるのがどれだけ苦手だったか思い出すわ。」

「子供達の前にかっこわるいところを見せるわけにもいかないからちゃんと嫌いな物を克服するのに大変だったわ。」昔、まだ１４歳だった頃自分たち二人にも苦手な物をあった事を思い出し、大人になってきてからは苦手な物を克服するようになってきて、嫌いな物を食べれるようにしないと思ったラブとせつな。それから食事が終えたらアイとマコトは二人の母親に呼ばれて、部屋へ入室した。

「ラブママ、せつなママ、どうして呼んだの？」

「あなたたち二人に渡したい物があるのよ。」

「渡したい物？」

「うふふ、二人がママの持っているあれと同じよ。」アイとマコトに自分たち二人が持っている物と同じ物を見せた。

「これって、もしかして？」

「ママ達がプリキュアに変身する時に使うリンクルン？」

「当たり～！」アイとマコトはラブから渡されたのはラブとせつなが持っているリンクルンだった。

「どうしてママ達は私とアイに渡したの？」

「ママね、ラブママと一緒に相談したのよ。アイやマコトが１４歳になった時にあなた達二人にプリキュアの力を渡す日を待っていたのよ。」

「プリキュアになるって事は世界を守らなきゃいけない使命と責任感を背負わなきゃいけないのよ。でも使命や責任感だけじゃなくてみんなを守りたいというその強い想いがあって最後まで戦えたのよ。」ラブもせつなもプリキュアとして世界を守る強い使命と責任感を背負いながら戦って来た。また使命や責任以外にもみんなを守りたいというその強い気持ちも持ちながらプリキュアに変身して戦った。

「プリキュアとして・・・・。」

「あなた達二人もプリキュアになったら大変かもしれないけどママ達がちゃんといろいろ教えてあげるからね。」

「うん、あたしもママやなぎささん達みたいにプリキュアになれるんだね。」

「私とアイがプリキュアになって世界を守る・・・・。」母達と同じプリキュアなれる事と、プリキュアになって世界を守る事でもあった。

「ママ、あたしママ達みたいにプリキュアになってみんなを守ってみせるよ。」

「私とアイがママみたいにプリキュアになる事はママと同じようにプリキュアになれるって事だね。」

「じゃあ二人とも受け取って。」二人にそれぞれのリンクルンを手渡し、またリンクルンを渡したと同時にプリキュア「に必要な変身キー『ピックルン』、アイにはリルン、マコトにはミルンを渡した。

「ママ、早速変身してみるよ。」

「じゃあ変身するよ。」リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「これが、あたし達・・・・。」プリキュアに変身した姿に驚く二人。

「あたしとせつなにそっくりよ。」

「アイとマコトが変身した姿って私とラブした変身した姿に似ているわ。」アイとマコトがプリキュアに変身した姿は、母が変身したキュアピーチ、キュアパッションにそれぞれ少し酷似していた。

「あたしがキュアピーチ？！」

「私がキュアパッション？！」母が変身していたプリキュアに酷似している事に驚いた二人。

「なんだか親がプリキュアだったから子がプリキュアに変身して、変身したのが昔のあたし達って・・・・・。」

「でも服装とかが少し違うわ。」

「でもプリキュアに変身できたんだからこれからはプリキュアとしてちゃんとやっていかないと。」

「そうよね、ママと同じプリキュアになれてよかったわ。」

「二人がプリキュアに変身できたのは良いけど・・・・・。」

「昔の私たちに似ているって言うのが・・・・。」初めて、プリキュアに変身したアイとマコト。物語はまだ始まったばかり、これから先プリキュアとして待ち受ける数々の運命が立ちはばかろうとし

ていた。

次回　2話へ続く

第2話　私たちの初めての戦い（前書き）

第二話は初めての戦闘とこの小説における敵キャラです。少し変わったところも少しあります。

第2話　私たちの初めての戦い

ラブとせつなの双子の娘アイとマコトが二人の母親と同じようにプリキュアに変身したが、まだ変身したばりでプリキュアの名前が決まっておらず、戦闘経験もあらずプリキュアとしてはまだまだ・・・・であった。

「キュアピーチがラブママだから、キュアブラックがなぎささんで、キュアメロディが響さんで・・・・・・。」

「キュアパッションがせつなママだから、キュアホワイトがほのかさんで、キュアリズムが奏さんだから・・・・・・。」二人は母やなぎさやほのか達はプリキュアに変身するとき名前をあげる事に対して二人はプリキュアに変身して名前をを何にするのか考えていた。

「二人ともどうしたの？」ラブとせつなの母親二人が近くにやって来た。

「実はね、私とアイがプリキュアに変身して名前をあげるのにいろいろ考えていたのよ。」

「ラブママとせつなママはプリキュアに変身した時にどうやってプリキュアの名前を言ったの？」

「うーん、ママも最初プリキュアに変身した時はプリキュアの名前は自分でもわからないわ。」

「みんな最初にプリキュアに変身した姿はいきなり名前をあげてたわ。」

「うーん、なんて言う名前で名前で決めれば良いんだろう。」
「じゃあ、あたしはラブママのピーチから名前取ろうかな～。」
「私はせつなママ達のキュアパッションの名前を使っていこうかな～。」
「こら、ママ達の名前から使う事は許さないわ。」
「いいじゃん、親子なんだからキュアピーチって名乗ってもいいじゃん。」
「同じ名前が二人もいるとママは困るわ。」
「変身姿が似そっくりはわかるけど、名前も同じだと少し困るわ。」プリキュアである母二人から姿が似ていても生も同じになると同じ名前は一つにして欲しいと断られ、自分たちが変身するプリキュアの名前を二つも名乗られるとやっぱり困ると思い、却下を言い渡した。それからアイとマコトは外へ歩き回りながら未だに自分たちの変身するプリキュアの名前の事を未だに考えていた。
「そっちは名前決まった？」
「ぜんぜんよ。」
「ママったら別にママのプリキュアの名前を使っても良いのにどうしてダメなのかな？」
「プリキュアの子供なのに親の名前使っていいのに。」そう愚痴を

言いながら歩いていく。二人が遠く離れた場所から一人の不審な人物がこの町に突如現れた。

「ここがミッドスターか、あのお方からまずはここを征服しろと言われた。この世界はどうやらまだ我々の存在に気付いていないそうだな。」不審な人物はこの世界を征服するために送られてきた事で、その人物からとてつもない邪気が漂っていた。

「この世界を征服してここを拠点としていく。」その頃、アイとマコトの二人はスーパーマーケットでそれぞれの果物を買って、おやつに食べていた。

「このリンゴおいしいわ。」赤くて綺麗なリンゴを手で持ちながら食べ歩くアイ。

「さくらんぼもおいしいわ。」小さくて可愛いさくらんぼを1つずつ食べるマコト。

「それにしてもプリキュアの名前適当に決めたほうがいいかな～？」

「適当はダメよ、適当な名前使うとプリキュアが台無しになっちゃうから。」

「でも名前決めないと名無しのプリキュアって言う訳にもいかないから。」そう言いながら二人はプリキュアの名前を考えていた。二人は街角を通り越してすぐ近くにある公園へと入った。

「なんか公園に来ちゃったね。」

「公園にいくと少し落ち着くわ。」公園のベンチに座って二人は少

し気分を落ち着かせて、周りが賑やかな雰囲気を見ていた。

「公園でこうしているとみんな楽しく過ごしているわね。」

「小さい頃はラブママとせつなママによく連れてこられた事を思い出すわ。」

「公園でよく砂場で一緒に遊んだり、ブランコに乗ったりしていたわ。」幼い頃、二人の母親によく公園へ連れて行って一緒に遊んだ事を思い出す二人。母親との思い出を一番大事にし、母親の事を一番大好きである二人。公園に不審な人物が近くにやってきた。

「この世界の人間共は下らない毎日を過ごしているそうだな、実に下らん。まあいい挨拶代わりにこの世界の人間共に我がヘルエビルの力を思い知らせてくれる。」突如姿を変えて、赤い衣装の格好をして現れた。

「俺の名はガーレッド、ヘルエビルの幹部の一人！！お前達に恐怖と地獄を味合わせてやる！！」その人物はガーレッドと名乗り、謎の組織ヘルエビルの幹部の一人。服のポケットから不気味なカードを出して滑り台に投げつけた。

「出でよ、イライラー！！」カードに投げつけた滑り台は怪物イライラーにさせて、公園にいる人達に襲いかかった。

「イライラー！！」

「きゃあー！！」

「助けてー！！」滑り台イライラーから逃げていく人達・

「ん？」

「何か騒がしいわ？」急に人が騒いでいる声を聞いて近くへ駆けつけた。

「何あれ？！」公園で暴れているイライラーを初めて光景する二人。滑降部を鞭にして地面にたたきつける滑り台イライラー。

「イライラー！！」

「こっちに来るよ。」こっちに襲いかかってきて二人はそのままあわてて逃げはじめた。

「わあっ！！」後ろから足で踏んづけようとしてくる滑り台イライラーから走って逃げ回り、公園内を逃げ回り続けるアイとマコト。どこか隠れそうな場所を必死で見つけ出そうと滑り台イライラーから逃げ回る。

「どこか、隠れそうな場所ないのかな？！」

「ああー、もうどこにあるのー！！」走って走って逃げ回っても隠れるところが見つからなくて焦りだし、このままでは二人ともピンチに晒されてしまう危機に陥ってしまう。

「イライラー！！」

「はあ、はあ、はあー。」

「もうだめだわ、逃げ切ってだめだわ。」

「ここで諦めちゃだめよ、まだあたし達にままからもらったプリキュアに変身する力があるのよ！」

「でも名前がまだ決まっていなくて・・・・。」

「とにかくプリキュアに変身して戦う事が大事よ！二人で変身しようよ、マコト。」

「アイも一緒にママからもらったプリキュアの力をここで見せてあげないと。」ポケットからリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの2人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「イライラー！！」

「ん、なんだあれは?！」ガーレットは逃げ回っていた二人がプリキュアに変身した姿を目の当たりを光景した。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」プリキュアに変身したアイは自らキュアアップルと名乗った。

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」プリキュアに変身したマコトは自らキュアチェリーと名乗った。

「フレッシュプリキュア！！」プリキュアに変身した二人は、プリ

キュアの名前を自分で名乗りを上げた。

「プリキュアの名前やっと決まったよ！」

「私もよ！」

「あたしの名前はキュアアップル」

「私はキュアチェリーよ。」それぞれ自分たちが決めた名前を言い、ようやくプリキュアの名前が決まって喜ぶ二人。

「プリキュアか、この世界にも現れるとは厄介な事だ。イライラー！！」

「イライラー！！」滑り台イライラーは滑降部をプリキュアに向けて叩こうとした。バシっ！！！

「ん？！」滑り台イライラーの滑降部を手で掴み、そのまま思いっきり勢いよく投げ飛ばそうとした。

「はあああっ！！」手で掴んだイアイラーをそのまま投げ飛ばして、地面に思いっきりぶつけた。

「イライラーっ！！」

「むっ！」プリキュアの力をみて驚愕し、今後の驚異となられる存在と感じ、ヘルエビルに大きな存在としてなられる事になった。地面から立ち上がった滑り台イライラーは今度は足で踏みつぶそうとした。

「アップル、来るわよ！」

「チェリー、かわすよ！！」振り下ろしてくる足をジャンプしてかわして、空高く身体を華麗に舞ながら同時攻撃でお見舞いしようとした。

「行くよ、チェリー。」

「アップルも一緒に仕掛けるわ。」

「ダブルプリキュアキック！！」滑り台イライラーに急降下しながら飛び蹴りを繰り出す。

「グオオオー！！」二人の同時攻撃で倒れはじめるイライラー。

「今よ。」二人はそれぞれ頭上で両手を叩いてから、左右の腰元に手をおき、　胸の前で両手を使ってハートの形を作った。

「悪いの悪いの飛んでいけ！！」

「プリキュア・ラブハート！」

「プリキュア・ハピネスハート！」それぞれのプリキュアから放つハート型の光線がイライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」プリキュアの放つ光線で敵は浄化され、元の滑り台に戻った。

「プリキュア、このことはあのお方に報告せねば！」一旦引き上げるガーレット。

「やった！！」

「初めての戦闘、楽勝だったわ。」プリキュアとして初めての戦闘は、苦戦もなくそのまま簡単に倒す事が出来た初戦であった。自宅に帰った二人は二人の母親と一緒に夕食を食べながら会話をした。

「公園に怪物が現れた？」

「あたしとマコトはプリキュアに変身してその怪物をやっつけたのよ。」公園で怪物が現れてアイとマコトがプリキュアに変身してその怪物をやっつけた事を聞かされたラブとせつな。

「ママやなぎさや咲やのぞみ達も最初は怪物が現れてそこに妖精が現れて初めてプリキュアに変身して戦ったのよ。」昔の事を思い出して自分も最初、怪物に遭遇してピンチになったときそこで初めてプリキュアに変身して怪物と戦ってきた。

「ママ、アイとマコトの二人がプリキュアになってママ達と同じように怪物と戦う事になるんだね。」

「ママももし二人がピンチの時になったら津でも駆けつけに来てあげるからね。ママ達もプリキュアの力は今でもあるのよ。」

「それと、ようやく私たちの変身するプリキュアの名前が決まったよ。」

「えっ、二人とも名前は決まったの？」

「名前はキュア何？」アイとマコトがようやく自分たちが変身する

プリキュアの名前が決まったと娘達がどんな名前のプリキュアか今から双子の娘から口に出して言おうとした。

「あたしはキュアアップル。」

「私はキュアチェリー。」アイからはキュアアップル、マコトからはキュアチェリーとそれぞれのプリキュアの名前をプリキュアである母ラブとせつなに紹介した。

「ママ達のプリキュアの名前に少し似ているわ。」

「姿も名前も似ているんなら親子でプリキュアはどうかな？」

「二人のママと一緒に変身して戦うのもあたしは見たいな。」

「ウフフフ、ママのプリキュア姿はいつでも見せてあげるわ。」

「ママのプリキュア姿はとてビューティーかも？」

「ママがプリキュアに変身する姿今見せて。」

「写真で見ているのしかないからラブママとせつなママの二人がプリキュアに変身して生で見るのも是非見せて。」アイとマコトの双子の娘から母親がプリキュアに変身した姿をどうしてもこの目で見たいと求められてきた。

「ダーメ、今は変身しません。」

「今度変身するからそれまでに我慢してて。」

「ああ〜、もうママったらけち。」

「生で見たかったな。」アイとマコトがプリキュアとしての初めての戦い、そして謎の組織ヘルエビルが今後、どういう展開を巻き超すのか物語は始まったばかりであった。

次回　3話へ続く

第3話　ママもプリキュアに変身します（前書き）

ラブとせつなの参戦です。家族４人揃ったプリキュアの活躍を是非見てください。

第3話　ママもプリキュアに変身します

今日は日曜日、この日はいつも家族と一緒に過ごす時間が多く、日曜日はラブは仕事が休みで休みの日は家で家族一緒に家事をしている。家の廊下の床で掃除機で綺麗にしながら吸い取っていくラブ。

「ふうー、廊下もだいたい綺麗になったかな？」と言いながら、廊下と階段の床の掃除を終えたラブは1階の向かった。

「ラブお疲れ様、掃除疲れたでしょ？」

「大丈夫、平気よ。」

「もうラブったら。」

「せつなの方こそ。」二人は仲良しぷっりの会話でラブラブで、娘達と一緒にソファーに座った。

「ラブママ、せつなママと家族４人で一緒に座るのも心地良いわ。」

「家族４人で一緒にいるのが一番だわ。」

「家族揃って座るのはママも落ち着くわ。」

「家族で揃うと幸せが感じるわ。」家族一緒に座ると４人は居心地よく気分が落ち着き、二人の母親と双子の娘は一緒にいると幸せを感じて、体を近くに寄らせた。

「気持ちいいわ。」

「こうしてお互いの体を近づけると何だか安らぎるわ。」

「ママもこうしているととっても癒されるわ。」

「家族が一緒になればなるほどみんなを愛しちゃうわ。」お互いの体を隣接させながら母子一緒に身体を隣接した状態で家族を深く愛し合うほどお互いを大切にする想いを寄せた。」それからお昼になって家族揃って一緒に昼食を取り、特に日曜日や休みの日などは特に家族と一緒に昼食を取る事が多い。

「いただきます。」夕食のようにいつも楽しい食事を取る４人。

「今日は私とアイもママ達と一緒にご飯を作ったわ。」

「家族でご飯作るのは楽しい事かな。」

「まあアイとマコトったら、二人ともラブママやせつなママの事が大好きなんだから。」

「ラブママの方こそ、可愛い娘達の事が大好きでしょ?」

「うふ、もう家族でラブラブ何だから。」

「家族全員もう愛し合っているわ。」家族でラブラブっぷりは食事の時も相変わらずで、家族が愛し合えば愛し合うほど仲が良い関係になる。

「今日は家族で作った簡単なパスタはおいしいわ。」

「家族４人揃って料理したり食べたりするのは楽しいわ。」

「そうね、こうして過ごすのも楽しいわ。」

「家族が一緒にいればとっても幸せな気分だわ。」

「家族は一緒にいるのが一番幸せかな。」家族全員揃って一緒にいるとお互い幸せな気分を感じて、この４人家族はお互いを愛し合ったり、家族一緒に協力しながら手を合わせたり母と子を大切に思いやる気持ちを持つ。食事が終えて夕食の買い物に出かけに行こうと家を出てスーパーマーケットへ一緒に向かった。

「今日の夕食は何にがいいかな？」

「あたしはオムライスがいい。」

「私はグラタンが良いわ。」夕食をそれぞれ自分の食べたいのを挙げていくアイとマコト。

「二人とまだ決まっていないから店に行っていろいろ見て決める事よ。」

「ええ～。」

「今夜の夕食はピーマンやニンジンも入るかもしれないよ～。」

「それだけはやめて～。」

「二人とも好き嫌いは言わないのよ。」

「わかったわ・・・・・。」

「ニンジン嫌い・・・・・。」夕食を難易するのか家族でいろいろと話し合いながら歩いていき、家族が今夜の夕食にいる材料をスーパーマーケットで見て決めていこうとした。一方、どこか別の異次元世界における場所で前回のプリキュアとの戦いでこの世界にプリキュアが出現した事を組織の首領に報告するガーレッド。

「プリキュアがこの世界においても現れたそうです。」

「プリキュア、あの伝説の戦士がここにも存在していたというのか。」

「はい、今回最初の行動がプリキュアに邪魔されたせいで台無しにされた。」

「ガーレッドよ、自分の失敗を他人に押しつけるでない。」

「ですがしかし・・・・・。」

「ワシの言う事が聞けないのか?」威厳の鋭い目つきでガーレッドをにらむヘルエビルの首領。

「ははっ、この作戦の失態は自分にあります。」

「よし、プリキュアを倒し再びミッドスターを征服するのだ。」

「了解であります。」こうして再びミッドスターへと向かってプリキュアを倒す事とミッドスターを征服する事を優先に目処においたガーレッド。その頃スーパーマーケットで店内で品物をいろいろと

見回る桃園一家。

「どれが良いのかな？」まずは野菜の方から見てどれが良いのか考えて、今夜の夕食に作る材料を決めようとしていた。

「にんじんだけは入れて欲しくないよ・・・・。」

「ピーマンも入れるとさすがに嫌になっちゃうから・・・・。」

「また好き嫌いを言っているわね。二人ともそんなに好き嫌い言うんならママが入れちゃうわよ。」

「やめて、もう言わないから。」

「そんなに好き嫌いばっかり言うとママ悲しんじゃうわ。」

「もうラブママったらやめてよ。」

「うふふ、アイやマコトも冗談通じないんだから。」

「もうちゃんとふざけないで決めてよ。」

「はいはい。」家族４人は店内の品物をよく見ながらよく工夫しながら考えており、だが家族４人で考えるのも結構時間がかかっていた。スーパーマーケット店内にてガーレッドが一般人に姿を身を隠してやってきた。

「この人間共はどうやら大勢いるみたいだな、この建物で何か騒がしいみたいだな。」スーパーマーケットの中を歩いて見ながら人が大勢いる事を気にかけていて、スーパーマーケット内で人が商品を

買ったりしているのを見るガーレッド。

「人間共はまったく何かを持って帰っているそうだな。」ガーレッドは人が商品を購入しながら出ていく姿を見ていた。

「イライラするな。」

「あのー、どうかなされたんですか？」スーパーマーケットの店員が不機嫌そうなガーレッドに声を掛けた。

「おい、貴様ここはなんて言うところだ？」

「ここですか、この店はお客様がご商品を買うところです。お客様は何を探しに求められますか？」

「ふざけた事を・・・・・。」

「えっ？」一般人の姿からヘルエビルの幹部としての姿へと変えて、服のポケットから不気味なカードを出してレジに投げつけた。

「出でよ、イライラー！！」レジに投げつけたカードはイライラーへと姿を変えて店内で暴れ始めた。その頃、夕食の材料をようやく集めてレジへ向かう桃園一家。

「これで夕食の材料も決まりね。」

「後は作るだけね。」

「きゃあー。」

「あれ、人が騒いでいるわ。」

「何かセールでもやっているのかしら？」

「気になるからとにかく行って見るしかないね。」人が突然遠くから騒いでいるのを見て、何故騒いでるのか気にかけて４人は様子見に行きはじめた。そこで人が騒いでいるのは何とイライラーが暴れていたのであった。

「イライラー！！」

「助けてー！！」

「あれはこの間現れた怪物だわ！」先日倒したばかりのイライラーが今度はスーパーマーケット内で現れるのを見たアイとマコト。

「知っているの？」

「私たちもわからないけど、けど公園で暴れたのと同じよ。」先日公園で戦った倒したイライラーも今回現れたのと同じと確認した。イライラーは４人の方にも襲いかかろうとしてきた。

「来るわよ！！」

「とにかく逃げる事だけ考えるわ！！」近づいてきたらイライラーから急いで走り出して逃げ出す４人。それを後ろから追って追尾するレジイライラー。

「イライラー！！」レジの入力ボタンから金銭型ミサイルをいくつか発射してきた。

「きゃあー！！」後ろから発射してきた金銭ミサイルの爆発で吹き飛ばされた４人。

「いた・・・・・・。」

「まずい来るわよ！！」後ろからレジイライラーが近づいて来ようとした。

「プリキュアに変身して戦うしかないわ。」

「そうね、とにかく変身するわ。」二人はリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、アイとマコトの２人はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「勇気と愛のハート、キュアアップル！」

「優しさと幸せのハート、キュアチェリー！」

「フレッシュプリキュア！！」プリキュアに変身した二人は、レジイライラーに攻撃をしかかった。

「イライラー！！」レジの入力ボタンを押して金銭型ミサイルを発射してプリキュアに攻撃をした。

「はあっ、たぁっ！！」発射されてきた金銭型ミサイルを殴り払い、

またミサイルを掴んでレジイライラーに投げ返した。

「うわー！！」自分が発射したミサイルがプリキュアに投げ返されて逆にダメージをくらい、その隙にプリキュアはダメージを食らっている間に攻撃を仕掛けようとした。

「はあああっ！！」二人同時攻撃で間を挟んでレジイライラーに直接食らわせた。

「うわー！！」

「今日も順調よ。」

「早く終わらせて、すまさないと！」すぐにでもイライラーを片付けて家族一緒に夕食の支度をしていきたいと言う思いで倒そうとしている。

「そうはさせん！！」突然遠くから炎がキュアアップルとキュアチェリーの二人に向けられてきた。

「！！」すぐにその炎からかわした二人。

「どこから攻撃してきたの？！」

「この俺だっ！！」廊下の遠くからプリキュア達の近くにやってきたガーレッド。

「誰なの？！」

「貴方一体何者？！」

「俺か、俺の名はヘルエビルの幹部の一人ガーレッド！！小まずはこの世界を征服してそして全世界を我がエビルデッドのものにするのだ！！」プリキュアとエビルデッドの幹部がついに対面して、お互いの顔を初めて認識し、そして存在を確認した。

「そんな事はさせないわ！！」ガーレッドに殴りかかろうとするアップル。

「ふん！！」熱光線でアップルに向けて直接食らわせた。

「きゃあああっ！！」

「アップル！！」ガーレッドの熱光線を食らって倒れるアップル。

「ううううっ。」たれたアップルに直接殴りかかろうとしてくるガーレッド。

「ああっ！！」身体を横に転ばしながらガーレッドが繰り出そうとしてくる拳をかわしたが・・・。

「イライラー！！」レジイライラーは今度はレジから巨大なレジートを出して転んでいるアップルの身体に巻き付かせた。

「きゃああっ！！」レジイライラーに身動きを封じられてピンチに陥ったアップル。

「アップル！！」

「よそ見をするな！！」アップルの心配をしているチェリーにガー

レッドが直接拳で彼女に殴りかかった。

「あああああっ！！」ガーレッドの攻撃を食らって倒れるチェリー。倒れているチェリーにも巨大レシートを出してチェリーの身体に巻き付かせた。

「しまった、身体が！！」チェリーも身動きが封じられて、プリキュアはピンチに陥ってしまった。

「ハハハハハ、どうしてもう終わりか、プリキュアはこの程度だったのか？！」プリキュアを追い詰めて勝利の宣言と感じたガーレッド。

「二人まとめてとどめを刺してやる！！」雨後異を封じられたプリキュアにとどめを刺そうとするが・・・。

「そうはさせないわ！！」突然ラブとせつなの二人が、近くに現れた。

「何だ貴様は？！」

「ラブママ・・・・。」

「せつなママ・・・・。」

「私たちの子供をいじめるなんて母親として許さないわ？！」

「母親だと？！たわけた事をプリキュアでもない貴様ら二人に何が出来るんだ。」

「マラブママ。」

「せつなママ。」

「二人とも待ってて、ママ達も今から変身するから。」二人の母親は娘達と同じようにリンクルンを取りだして、リンクルンにそれぞれの必要なピックルンが変身した鍵を刺した。それに反応し、カバーが開き、ボタンを押して、発光し始めた。

「ん？」

「チェンジ！プリキュア！ビートアップ！」光が満ちて、ラブとせつなの二人の母親はその光によって髪と服が一変し、髪は伸び、服はダンス衣装のようなドレスに身を包み、腰にリンクルンをかけた。

「ピンクのハートは愛ある印、もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」キュアピーチに変身したラブ。

「真っ赤なハートは幸せの証、熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」キュアパッションへと変身したせつな。

「フレッシュプリキュア！」再びプリキュアに変身した二人は、大人の姿として服や髪型も変わっていて、目の前にいる平和の浴び焼かす者を倒そうとした。

「プリキュアがまだいたというのか？！」

「そうよ、私達はかつて世界を救った伝説のプリキュアよ！！」これまで世界の危機を救った伝説プリキュアであると告げるピーチとパッション。

「今更現れて何をすると言うのだ！」

「私たちの娘をいじめてくれたわね、それに夕食の買い物を邪魔をするなんて貴方を許さないわ！！」

「ほざかしい、イライラーこいつらも始末しろ！」

「イライラー！！」二人のプリキュアにも巨大なレシートを出して、巻き付けようとしたが。

「はっ！！」

「たああっ！！」二人は拳で立ったの1発で敵の技を看破した。

「何、イライラーの技を受け止めただと？！」イライラーの技が簡単に破られたのをみて驚いたガーレッド。二人はそのままレジイライラーに同時攻撃を仕掛けようとした。

「ダブル・プリキュアパンチ！！」二人の繰り出す拳でレジイライラーに直撃を食らわて遠くへ吹き飛ばし、巨大レシートで身体を巻き付かれた二人の娘プリキュアをところへ向かって、二人の身体に巻き付いた巨大レシートを破った。

「二人とも大丈夫？」

「大丈夫よ。」

「私も平気よ、ママもプリキュアに変身したんだ。」

「当たり前よ、ママ達もこうみえてもプリキュア何だから。」
「可愛い娘を助ける為に二人のママがプリキュアに変身しちゃうんだから。」
「ママだってプリキュアに変身した姿は可愛いのよ。」
「年齢的にはそんなに・・・・・。」
「こら、まだママ達だって若いのよ。」
「人の歳は女に失礼よ。」
「姿が綺麗になったってところね。」娘に突っ込みれながらプリキュアに変身した母娘の会話もしたり、親子仲は相変わらずであった。
「喋っている暇があったら戦う事だな、イライラー！」
「イライラー！！」ガーレッドはレジイライラーを立ち上がらせて、４人揃ったプリキュアに襲わせようとしてきた。
「来るわよ！」
「わかっているわ。」
「じゃあ家族プリキュアの力を見せてあげるわ。」家族４人のプリキュアは各自で分散してレジイライラーの周りに散らばって行動を取り始めた。
「ええーい、４人がバラバラになったところでまとめて片付けてや

る、イライラー！！」レジの入力ボタンを押して中から金銭型ミサイルをいくつか発射してばらばらに分かれた４人の方に向けた。

「ええーい！」

「それっ！」発射してきた金銭型ミサイルを殴り落としたり、またミサイルを投げ返してレジイライラーの中に入れた。

「うわー！！」プリキュアに投げ返された攻撃が中に入れられてダメージを負った。

「よし今よ。」母子４人ははそれぞれ頭上で両手を叩いてから、左右の腰元に手をおき、　胸の前で両手を使ってハートの形を作った。

「悪いの悪いの飛んでいけ！！」

「プリキュア・ラブハート！！」

「プリキュア・ハピネスハート！！」

「プリキュア・ラブサンシャイン！！」

「プリキュアハピネスウェーブ！！」

「これが親子揃った力よ、プリキュアファミリーハート！！」それぞれのプリキュアから放つハート型の光線が同時にイライラーに向けた。

「イライ・・・スッキリー・・・・・。」プリキュアの放つ光線で敵は浄化され、元のレジに戻った。

「今度は二人も現れるとは、ええーい覚えていろ！！」この場からすぐに逃げ出すガーレッド。

「やったわ。」

「今日はママがプリキュアに変身したって言うのもめったにないわ。」

「あらそうかしら？」

「ママがプリキュアに変身した姿は美人だわ。」

「あら、ありがとう。二人のママの事はプリキュアの姿になっても大好き？」

「うん、ママの事は一番大好きよ。」

「ありがとう。」こうして一旦戦闘は終わり、自宅へ帰った。夕食の支度をして、家族４人で一緒に作った。今夜の夕食は家族４人で作った麻婆豆腐を食べる事になった。

「いただきます。」あつあつの麻婆豆腐を食べながら実感して、加増４人でＴくったご飯を味わって口にする。

「４人で作るとおいしいわ。」

「家族の味はおいしいわ。」

「辛くておいしいこの味はたまらないわ。」

「家族一緒に揃うとおいしくなるわ。」楽しい夕食を送りながら、笑顔で明るく食べながら過ごした。夕食が食べ終わった後は食器などを洗ったり、片付けたりし、そうしたら４人は一緒に部屋へ向かった。ベッドの上で寝ころんで今日の事を一緒に話したりする４人。

「今日は大変だったけど、家族揃ってプリキュアに変身して戦ったのがあたしは嬉しかったわ。」家族揃ってプリキュアに変身して戦った事が母親と一緒に悪い奴らと戦えて出来た事を喜ぶアイ。

「ママもアイやマコト達と一緒に揃って戦えたのは嬉しいわ。」

「家族４人でいると何かいろいろとね・・・・。」

「今日は体も疲れているみたいだからゆっくり休んで眠りましょう。」

「お休みなさい。」こうして４人は疲れた体を休んでぐっすり眠った。

次回　４話へ続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3410z/

家族はプリキュア

2011年12月11日21時50分発行